少女像（ブロンズ）は泣かなかった

内田康夫

中公文庫

中公文庫

少女像(ブロンズ)は泣(な)かなかった

定価はカバーに表示してあります。

1996年10月 3 日印刷
1996年10月18日発行

著　者　内田康夫(うちだやすお)

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋 2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1996 CHUOKORON-SHA,INC. / Yasuo Uchida

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202711-X　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

少女像（ブロンズ）は泣かなかった

内田康夫

中央公論社

目次

越天楽がきこえる　7
ドクターブライダル　77
踏まれたすみれ　157
少女像（ブロンズ）は泣かなかった　225
自作解説　291

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

少女像（ブロンズ）は泣かなかった

越天楽がきこえる

1

十一月中旬ともなると、箱根の紅葉はもう盛りを過ぎてしまうらしい。それでも、湖畔付近や駒ケ岳の麓あたりには、まだ、ところどころに鮮やかな紅葉が残っていた。

河内は車のトランクから折り畳み式の車椅子を下ろして、慣れた手付きで組み立てた。赤いシートや銀色のフレームなど、ちょっと見ると華奢な感じだが、なかなか頑丈に出来ている。河内の56年型コルサよりは、よほど魅力的でさえある。

助手席の千晶を抱いて、車椅子に移す。

「まったく、いつまで経っても痩せっぽちだなあ」

不満そうに言った。

「しようがないでしょう。いくら食べても肥らないんだから」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

千晶も負けずにやり返した。

（おれがいなくなったら、この子は生きていけないのじゃないかな――）

河内はふと思い、（なんだ、親父でもないくせに――）と苦笑した。

千晶の父親・橋本圭一は去年の夏、多摩湖畔で死体となって発見された。兵庫県の丹波篠山（たんばささやま）にいるはずの橋本が、なぜ多摩湖畔で死んでいたのか――奇妙な事件であった。（『多摩湖畔殺人事件』光文社、参照）

東大和（ひがしやまと）警察署の部長刑事だった河内は、捜査の過程で千晶と知り合った。

千晶は不思議な娘だった。警察が手を焼いた難事件に、信じられないほどの粘りと神がかり的な着想で、解決への道を切り拓いた。

河内が神経性の胃潰瘍に悩まされている時期であった。医者からは「即刻、手術を」と宣告されながら、河内は事件捜査に没頭した。

河内を捜査に駆り立てたものは、千晶の存在といっていい。「車椅子の少女」でさえ、警察の及ばない「捜査」をするのに、少なくとも五体満足なおれが安閑としていられるか――という気持ちに衝（つ）き動かされた。

河内には、ちょうど千晶と同じくらいの年齢で亡くなった娘があった。妻に先立た

れ、そのあと唯一の生き甲斐のようなものだった娘も、数年前に死んだ。その娘の面影を千晶の上に見ていたのかもしれない。千晶の健気さを見ると、この娘のために何かしてやらなければ――という思いが込み上げてきた。

六桁の数字をメモした一枚の紙片だけが手掛かりという、難しい事件で、捜査はほとんど「迷宮入り」寸前の状態までいった。あとは千晶の執念と河内の情熱だけがつっ走っていた。

事件は文字どおり、劇的に解決した。だが、その瞬間、河内の胃の血管は破裂した。それから十日あまり、河内は生死の境を彷徨った。

千晶は河内の病気がそこまで悪化していることなど、まるで知らなかった。千晶が見舞いに行ったとき、河内は意識不明の状態が続いていた。河内が自分の我が儘な注文に、いのちを賭けて応えてくれたと知った時、千晶は頭が空白になるほど泣いた。

事件後、河内は警部補に昇格した。それは論功行賞であると同時に、ポンコツを閑職であるデスクワークに就かせるための、態のいい「陰謀」でもあった。かつては「捜査の鬼」とまで言われた河内が、いくら非番の日とはいえ、こんなふうにのんびり箱根に遊べるのも、彼にしてみれば不本意なことではあった。

空は半分ほど青空が広がってはいるのだが、低い雲が通り過ぎて、時折、太陽を遮る。

駒ヶ岳は七合目あたりから上が霧に煙っていた。いや、麓から見ると、雲がかかった状態である。

「このぶんだと、展望はきかないかもしれないわね」

千晶は残念そうに言った。

「まあいいじゃない。とにかく、せっかく箱根まできたのだから、駒ヶ岳ぐらい登らないで帰るのは悔しいしね」

河内は車椅子を押してロープウェイ乗り場へ向かった。

「そんなにいそがなくっても、ロープウェイは逃げたりしないわ」

千晶は笑いながら言った。車椅子を押す河内の足の運びは、せかせかと忙しい。

「ほんとだ、無意識にいつのまにか早足になっちゃうんだねえ」

河内も気がついて、感心したように言って笑った。考えてみると、のんびり歩いている刑事なんて、およそ想像できない。河内もいつだって、いくぶん前かがみの恰好(かっこう)で、せかせかと聞き込みに歩いたものだ。

「そんなに早足で歩いたら、疲れちゃうでしょう。ゆっくり歩いてください。でないと、なんだか申し訳なくて」
「何言ってるんだよ。痩せっぽちの子供のくせに」
「あら失礼ね、痩せても枯れても、子供じゃないわ」
「ははは、痩せても枯れてもって、そういう時に使うの、おかしいよ」
「そうね、ちょっとへんね。やっぱり子供なのかなあ」
千晶も声を立てて笑った。
千晶が笑うと、透き通るような白い貌(かお)にうっすらと紅が差して、まるでアンティックのフランス人形のように美しい。
ロープウエイ乗り場の最後のところは階段になっていたが、乗り場の係員が協力して、車椅子を上げてくれた。
ロープウエイのゴンドラは、ほぼ八分で頂上に到着する。同時に下りのゴンドラも麓駅に着くわけだから、ほとんど待つ間もなく乗れた。
詰め込めば三十人以上は乗れそうなゴンドラだが、シーズンオフのウィークデーとあって、客は彼ら二人のほかに数人、若いグループの客が乗っただけだった。なんだ

か気がひけたけれど、時間がくると発車のベルを合図に、ゴンドラはゆるりと動きだした。

しばらくは芦ノ湖や、緑の絨毯を敷き詰めたような芝生、森などを眼下に見る雄大な景観がぐんぐん広がっていった。しかし、思ったとおり、途中から霧の中に入って、視界はせいぜい二、三十メートル先までしかきかなくなった。

霧の中から突然、下りのゴンドラが現れて、あっと思うまもなく擦れ違った。それからきっかり四分で頂上駅に到着した。

頂上駅には土産物店やレストランなどがある。大きな円筒形のストーブがあって、建物の中は暖かかった。しかし、視界がきかないので、売り物の三六〇度の景観は諦めるほかはない。グループ客は土産品を物色しはじめたが、千晶と河内は、重いガラス戸を開けて、駅の裏手に出てみた。

一面の霧で、気温はかなり低い。北東の風も吹いていた。霧が吹きつけて、衣服や髪の毛までがしっとりと濡れてくる。

千晶は肩をすくめ、フラノのハーフコートの襟を立てた。

「寒くないかい？」

河内は訊いた。
「平気よ、私は」
「中に入ろうよ」
河内は言って、車椅子の向きを変えようとした。
「待って……」
千晶は河内を制した。霧の彼方から、かすかに笛の音のようなメロディーが聞こえてきたのである。
「何かしら、あれ？」
「越天楽（えてんらく）みたいだな」
河内は言った。風のまにまに、きれぎれに聞こえるメロディーだが、確かにそれは雅楽の越天楽であった。
「こんな山の上で？　どうして？」
「さあねえ。神社か何かあるんじゃないのかな。そこで結婚式があるとか」
「行ってみましょうよ」
「この霧の中を？　風邪引きそうだな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com